現場の真相（リアル）

―初雁興業のリトライ―

誠実な伝え方を模索

職業体験　量・質ともに向上を

初雁興業（川越市、関根勇治社長）が技術系の人材採用で新たな工夫を模索している。毎年、大学・専門学校・高校から広くインターンシップを受け入れているものの、入社に至る成果が限られ、現状を打破する会社の魅力発信などでアイデアを練る。建設業界の課題についても正直に伝える地に足の着いた採用活動を目指す。

今年の同社は、10月末までに職業体験を5現場で実践、計7人（大学3年生6人・高校2年生1人）を受け入れた。自社が施工する土木・建築の建設現場に学生を招き、「プロの施工管理」に触れられる指導を心掛ける。過去3年間（2018～20年）の受け入れ実績が計6人だったのと比べれば、かなりのハイペースだ。

就活サイトの本格活用を今年始めたことで、会社の認知度が高まったとみている。卒業後、どれだけ実際の入社につなげられるかが今後の鍵。現状は、狙いと成果に乖離もみられるからだ。

初雁興業は18年7人、19年4人、20年4人、21年2人を採用。来春の新卒採用は7人が内定している。ただ、インターンシップを経た内定者は7人の中にはいない。インターンにこだわらなくとも一定の採用者を確保できているともいえるが、年間70億円以上の売上高を誇る組織を維持する上で、まだ十分な人数とはみていない。

特に技術系の担い手確保が待ったなしの中、実際の現場を知った上で入社を決めてくれる人材は、貴重な存在。インターンシップを継続する大きな理由だが、過去3年間でインターンに参加した6人のうち、入社に至ったのは専門学校卒の1人にとどまっている。

その1人は、受け入れ現場が例年より多かった19年（4現場計4人）の参加者だった。当時活用した現場は、県発注の小畔川護岸工事、大宮公園エントランス周辺改修工事、所沢市下安松地内道路改築工事など。

同社は、地域ならではの意義を有した建設現場を広く活用するとともに、受け入れ回数もできる限り増やすことが採用実績を伸ばすポイントの一つと捉え、精力的な展開に一層注力する考えだ。

今年は、県発注の県営霞川団地建築工事、勝瀬サージタンク前濁水復旧工事のほか、日本下水道事業団の大谷川雨水ポンプ場建設工事を開放した。年内は、さらに大学3年生1人を受け入れる予定という。

まずは「建設業の魅力、モノづくりの難しさ、面白さを実体験を通じて伝える」のがインターンシップの基本。その上で「業界のプラス面・マイナス面を誠実に伝えつつ、当社が考える今後の改善策も説明していく。社会人になる前に『働く（社会に貢献する）』ということを深く考える機会にしてほしい」と担当者は話す。

正直な対応が入社後の認識ギャップも是正し、短期間での離職を防ぐことにもなる。地域密着のゼネコンとして多くの実績・信頼を築いた会社であっても、新規採用の努力は避けられない。一年一年がリトライの継続だ。

新規採用までの流れで工夫を練る